HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	早川泰正教授と経済変動理論
Author(s)	小林, 好宏
Citation	北海道大學　經濟學研究, 30(4), 369-371
Issue Date	1981-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31533
Type	bulletin (article)
File Information	30(4)_P369-371.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

早川泰正教授と経済変動理論

小林好宏

経済変動論という分野が最も盛んであったのは，1950年代であったといえる。もちろん，景気変動という現象は19世紀以来注目されていたし，景気変動についてのデータ，予測等も古くから行なわれていた。そして，マクロ的な現象として景気変動を把え，分析することも古くから行なわれていた。古いタイプの景気循環論を体系化したのは，近代景気理論の父といわれるアルトゥール・シュピートホフである。しかし，これは景気変動の過程を記述し，それらの動きの原因を述べたものであって，こんにちの近代経済学の体系の中に位置づけられるものとは異なる。

経済変動理論が，理論的にも精緻なものとして定着するのは，ケインズ「一般理論」の出現の後である。すなわち，マクロ的な経済分析の方法が確立して以来，経済変動理論は急速に発展した。

もちろん，動学理論と呼ばれるものは，ポスト・ケインジァンの経済変動論以外にも数多くあった。しかし，こんにち学会の主流を占めているのは，ポスト・ケインジァンのそれである。

ケインズ『一般理論』が，短期的性格をもつという理由で，これを長期化動学化しようという試みは，数多くなされてきた。その方向は，二つある。一つはハロッドによる成長理論への方向であり，もう一つは乗数理論と加速度原理を結びつけたサムエルスンの分析とその応用による景気循環の分析である。この二つ，すなわち，景気の循環のメカニズムと，長期趨勢の議論を結びつけて，体系化したのが，J. R. ヒックスの A Coutribution to the Theory of Trade Cycle 1950 である。Harrod の Towards a Dynamic Economics が1948年に書かれた。ハロッドはすでに1939年に，経済成長に関

するエッセイを書いており，そこですでにケインズ体系の動学化の試みを行なっている。第2次大戦の中断を経て，Towards が公けにされ，ヒックスの Contribution が出るに及んで，ポスト・ケインジアンの動学理論は一挙に花をひらく。

ケインズやハロッドとは別個に，類似の体系を示したのは，M. カレツキーである。カレツキーの The Theory of Economic Dynamics 1952 である。したがって，1950年代前半というのは，経済変動論が近代経済学の最も華やかな分野であったといえる。

早川泰正教授が，新進の研究者として北大に赴任してこられた頃は，まさにそういう時期であった。早川教授は東京商大（現一橋大学）で故杉本栄一教授のもとで研究を続けられた後，北大に赴任されたのであるが，それから3年ほど後，昭和26年に最初の著作，『経済変動理論への途』（東洋経済新報社）を出版された。この書物は3編から成っており，第1編は，微視的分析と巨視的分析と題して，安定条件論，ランゲを中心とした新厚生経済学，アグリゲーションの問題等，主としてミクロ経済学における当時の主要なテーマをとりあげている。第2編は，巨視的動態理論と発展理論と題して，「経済変動の長期傾向法則を究明する」という課題を設定し，そのための手がかりとして，カレツキー，クライン，ドーマーの議論をとりあげ，そこから巨視的動態理論の必要な方向を見出そうとしている。

第3編は，変動と趨勢と題して，ハロッド，ヒックスそれに長期沈滞論におけるドーマーとスウィージーをとりあげ，さらに非線型加速因子と長期的趨勢の関連づけを問題にし，ヒックスの制約された循環の理論，グッドウィンのモデル等をとりあげている。

この書物は当時の学会における最先端を行くものであったが，ここでは自分自身のモデルを展開するというよりも，前述の課題のための手がかりや方向性をみつけ出そうとするものであったといえる。

それから6年ほどを費して，早川教授の経済変動理論に関するたゆまぬ研究が続けられる。その過程でマルクスの勉強をされた早川教授は，そこか

ら，マルクス恐慌論における不比例説と過少消費説の論争という周知の問題に注目し，マルクスの中で恐慌に関して首尾一貫した論理的整合性を持っているのは，過剰投資理論の論理である，と見きわめる。そして，この過剰投資理論こそ，後にシュピートホフやハイエクの理論とつながる側面をもつ，ということを見い出して，その遺産を受け継ぎ，自らの経済変動理論を構築されようとしたのである。こうして生まれたのが，昭和33年に東洋経済新報社から出された『経済変動理論』である。

モデルの中心となるのは「投資活動係数」と名付けられるもので，投資関数こそ経済変動のパターンのすべてを決定する基本要因となる。この書物は当時の学会でもきわめて高い評価を与えられた。

早川教授は，このモデルにもとづいて，戦後日本経済の景気循環を説明することを試みられた。こうして，誕生したのが『戦後日本経済と景気理論』(昭和47年，新評論）である。ここでも，過剰投資理論の考え方が一貫しており，それをもって日本の景気循環を説明しようとされている。

一方，世界の学界の動向は，といえば，1956年に R. M. Sollow が，A Contribution to the Theory of Economic Growth を発表して以来，以後，新古典派の成長理論が続々と登場するようになった。1960年代は新古典派の成長理論が花盛りとなり，景気循環理論は，1958年の Duesenberry による Business Cycles and Economic Growth をもって，いちおうできあがった，といわれる状況にある。しかし早川教授は，強い確信をもって，自己のモデルの拡張と応用を試みられており，景気循環論以外でも，たとえば，日本経済の今後の動向の解析にも，理論的分析のメスをふるわれている。

少なくとも，学界の一時代を画した経済変動理論の分野において，早川泰正教授は，わが国において第一人者の位置に挙げうるものと，私は確信している。